



地域を守り、  
淀川水系に貢献

だ い ど が わ  
**大戸川ダム**

大戸川ダム建設事業・事業概要

Daidogawa Dam Construction Project



**AIDOGAWA DAM**

# 地域を守り、淀川水系に貢献する「大戸川ダム」は、洪水調節専用の流水型ダムです

琵琶湖から流れ出る唯一の河川である瀬田川。

その支川である大戸川で洪水調節専用の流水型ダム「大戸川ダム」の建設事業が進んでいます。

大戸川ダムが建設されることで、大戸川沿川の洪水被害が軽減されるだけでなく、

淀川本川筋で唯一のダムである「天ヶ瀬ダム」と一体的に運用することで、

宇治川・淀川に対しても効果が発現し、

下流に位置する京都や大阪を洪水被害から守る大きな役割を担っています。

## 氾濫を繰り返す大戸川～「水七合に砂三合」

大戸川は、滋賀県の信楽山地(三重県との県境付近)にある高旗山(709.8m)を水源とし、甲賀市(旧信楽町)、大津市南部を流下して瀬田川に合流する、流路延長38km、流域面積約190km<sup>2</sup>の一級河川です。

大戸川周辺の山々では、藤原京や平城京の造営、東大寺などの南都七大寺の建立のための材木や燃料などとして木々が伐採されてきたことで山肌が荒れ、大雨のたびに大量の土砂が川へと流れ込みました。大戸川の流れは「水七合に砂三合」と言われるようになり、川底には土砂が堆積して氾濫が繰り返されました。

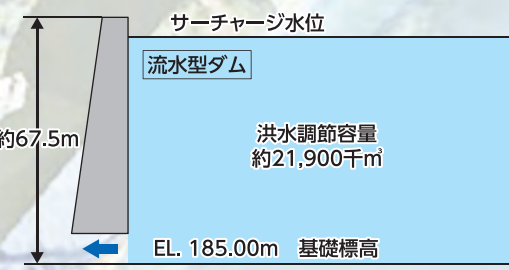
明治時代からは、近代的な砂防工事を実施してきましたが、氾濫はなくなっておりません。

3次元モデルによる完成イメージ  
概略設計完了時点版



## 大戸川ダムの諸元

位置(左岸): 滋賀県大津市上田上牧町  
 (右岸): 滋賀県大津市上田上桐生町  
 ダム型式: 重力式コンクリートダム  
 堤高: 約67.5m  
 堤頂長: 約183.2m  
 洪水調節容量: 約21,900千m<sup>3</sup>  
 事業区域: 大津市、栗東市、甲賀市



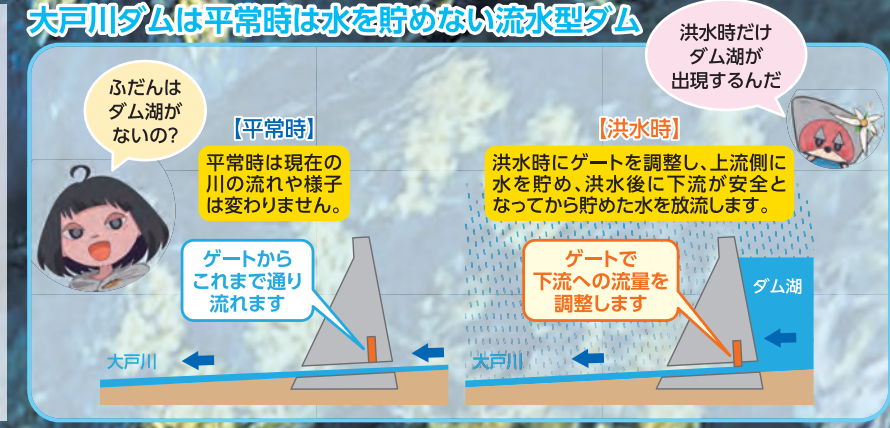
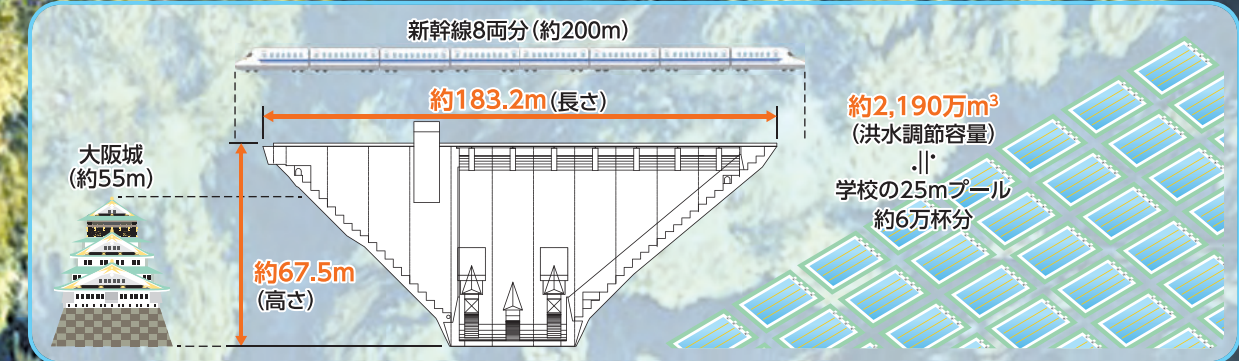
## 大戸川ダムの3つの効果

- **大戸川下流域の洪水被害の軽減**  
瀬田川に合流する大戸川の下流域を洪水から守ります。  
さらに、天ヶ瀬ダムと一体的に運用することで、
- **宇治川流域の洪水被害の軽減**  
「平等院」などの世界遺産もある宇治川流域を洪水から守ります。
- **淀川下流域の洪水被害の軽減**  
首都圏に次ぐ大都市圏である淀川下流域を洪水から守ります。

## 大戸川ダム建設の経緯

事業計画と事業着手	
昭和43(1968)年	予備調査着手
昭和53(1978)年 4月	実施計画調査着手
平成 元(1989)年 5月	建設事業採択(多目的ダム)
平成 4(1992)年10月	工事用道路着手
平成 6(1994)年10月	損失補償基準協定書の締結
平成10(1998)年 3月	事業区域内(大鳥居・桐生辻・黄瀬)の家屋移転が完了
平成11(1999)年 6月	付替県道大津信楽線着手
平成13(2001)年 7月	水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画決定
平成21(2009)年 3月	淀川水系河川整備計画策定 → 利水全量撤退を踏まえ、洪水調節専用ダムに計画変更、ダム本体工事については実施時期を検討
	12月 ダム事業の検証にかかる検討を開始
平成28(2016)年 8月	ダム事業の検証における対応方針決定
令和 3(2021)年 8月	淀川水系河川整備計画変更 → 必要な調査等を行ったうえで本体工事を実施
令和 5(2023)年 3月	付替県道大津信楽線完成

## 大戸川ダム図鑑



※現時点の案であり今後の調査・検討により変更する可能性があります。

# 12,480,000人が暮らす淀川水系

淀川は、琵琶湖から流れ出る唯一の河川である瀬田川が京都に入ると宇治川と名前を変え、その後、木津川、桂川と合流して淀川となり、大阪湾へ注ぐ一級河川です。

淀川水系は大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、三重の2府4県にまたがり、流域面積は8,240km<sup>2</sup>にもおよび、流域には1,248万人\*が暮らし、大阪や京都といった大都市を擁し、国内でも首都圏につぐ経済圏を誇り、長く歴史・文化の中心地として繁栄を続けています。

「大戸川ダム」は、淀川水系の本川筋で唯一のダムである「天ヶ瀬ダム」と一体的に運用することで、下流に位置する京都や大阪を洪水被害から守る大きな役割を担っています。

\*H27年国勢調査

## 何度となく大洪水を繰り返してきた淀川水系

淀川は過去に何度も氾濫を起こし、流域に大きな洪水被害をもたらし、その度に多くの人が犠牲となりました。淀川では明治18(1885)年の洪水を契機に制定された河川法に基づく近代的な治水事業に着手し、新淀川の開削や三川合流点の付替え、琵琶湖の出口における瀬田川洗堰(南郷洗堰)の建設など、大規模な事業が進められました。しかしその後も大雨や台風がくると淀川は氾濫し、洪水の度に河川整備の在り方が見直されてきました。

【淀川水系での主な水災害】



**明治18年の大洪水**  
大阪市内の大半が浸水。近代治水工事の先駆けとなる淀川改良工事が始まり、現在の淀川が形づくられた。



**大正6年の大洪水**  
高槻市大塚の堤防が決壊。流域全体でも多くの場所で堤防が壊れ、浸水家屋、死者が多数にのぼった。



**昭和28年台風13号**  
宇治川左岸向島地点が決壊。水系全体の根本的な治水対策が必要となり、天ヶ瀬ダムを含めたダム群の計画・整備を進めるきっかけとなった。

出典:国土交通省 淀川河川事務所

# 「大戸川ダム」の洪水調節効果は、大戸川に始まり、瀬田川、宇治川、淀川までおよびます。



## 宇治川流域の現状

### 淀川水系で最も負担が大きい天ヶ瀬ダム

淀川本川筋唯一のダムとして長く下流域を守ってきた天ヶ瀬ダムですが、治水容量の割に集水面積が大きく、大きな負担を抱えています。平成25(2013)年台風18号では、ダム湖への流入量が限度を超え、異常洪水時防災操作(緊急放流)を行う事態となりました。



【現在の天ヶ瀬ダムの集水面積】



## 宇治川流域の洪水被害の軽減

天ヶ瀬ダムと一体的に運用することで、「平等院」などの世界遺産もある宇治川流域を洪水から守ります。

## 宇治川流域の整備効果

大戸川ダムは天ヶ瀬ダムの流域(瀬田川洗堰上流を除く)の負担を補うもので、天ヶ瀬ダムの負担軽減により、洪水調節機能を最大限活用し、宇治川と淀川の安全性向上に大きく寄与します。

【大戸川ダム完成後の天ヶ瀬ダムの集水面積】



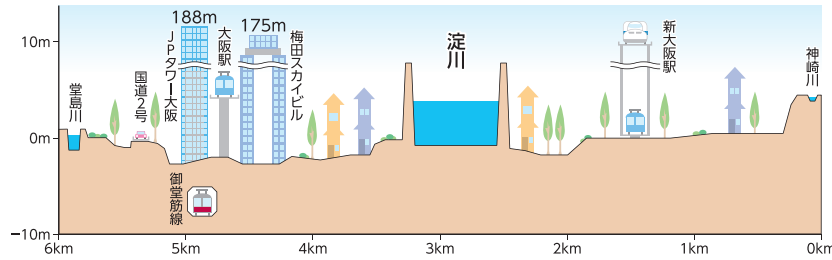
凡例  
洪水による浸水が懸念されるエリア

## 淀川下流域の現状

淀川下流域(大阪府域)には人口や社会インフラが集中しています。ひとたび洪水が起きると、人的被害の拡大や都市機能の麻痺が予想され、その影響は全国に波及すると言われています。

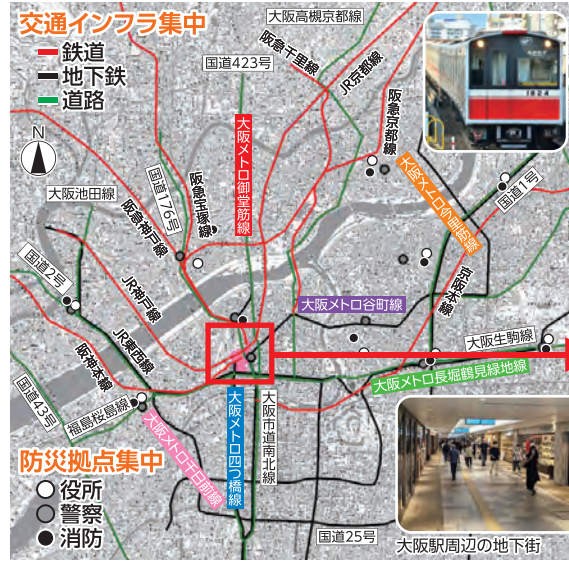
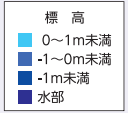


【大阪駅周辺の断面図】(イメージ)



### 淀川の高い堤防で守られる大阪平野

大阪平野は海拔ゼロメートル地帯で、淀川の高い堤防で都市が守られています。淀川周辺には行政機関や交通インフラが集中し、JR大阪駅はわずか1km程度しか離れていません。



## 新たな問題～地下空間の危険性

梅田周辺は国内有数の繁華街で、延べ面積約15haの地下街が地下鉄ともつながっています。水災害時、最も深刻な被害が予想されるのが地下空間です。近年、九州や関東では、地下施設の浸水被害が報告され、地下空間における都市水害が重要な課題となっています。



## 淀川下流域の整備効果

大阪駅周辺は交通インフラが集積し、地下空間が広がっています。淀川下流域の洪水調節を行う最後の砦である天ヶ瀬ダムが大戸川ダムとの一体的運用で洪水調節を負担することで、淀川下流域の洪水被害から守ることに繋がります。

## 上流のダムの洪水調節で成り立っている淀川下流域の安全

大きな災害を未然に防ぎ、淀川流域の暮らしを守るために、宇治川・木津川・桂川の合流点より上流に9基のダム・堰が配置され、各支川の洪水調節を行っています。刻一刻と変化する河川の状態を見極め、本川や支川の水位のバランスを図りながら、すべての治水施設の総力をもって流域の安全を守っています。



## 淀川下流域の洪水被害の軽減

天ヶ瀬ダムと一体的に運用することで、首都圏に次ぐ大都市圏である淀川下流域を洪水から守ります。

## 大戸川下流域の洪水被害の軽減

瀬田川に合流する大戸川の下流域を洪水から守ります。

## 大戸川下流域の現状

古くから森林伐採で山肌が荒れ、度々氾濫を繰り返している大戸川。明治時代から治山対策事業を講じてきましたが、支川が流入する下流域などでは、浸水被害が後を絶たない現状を抱えています。



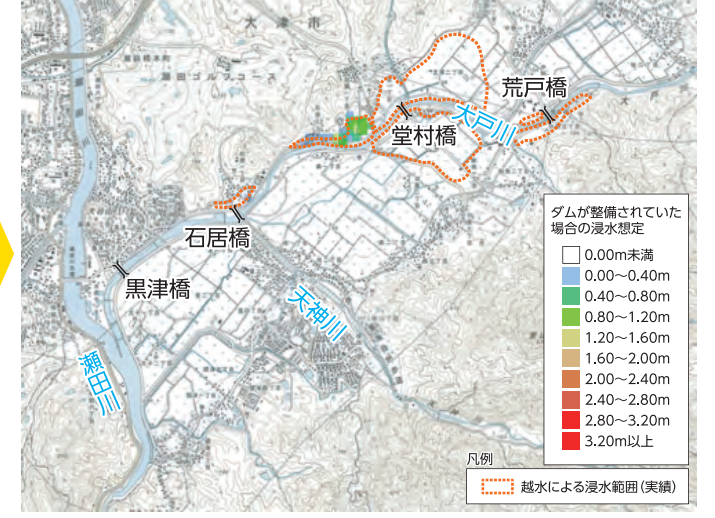
## 大戸川下流域の整備効果

近年で最大の水害となった平成25(2013)年台風18号と同様の降雨を想定すると、大戸川ダムが整備されていた場合、ダムの下流地域で約1.4m水位を低下させる効果があり、浸水被害を大きく減少させることができたことと推定されています。

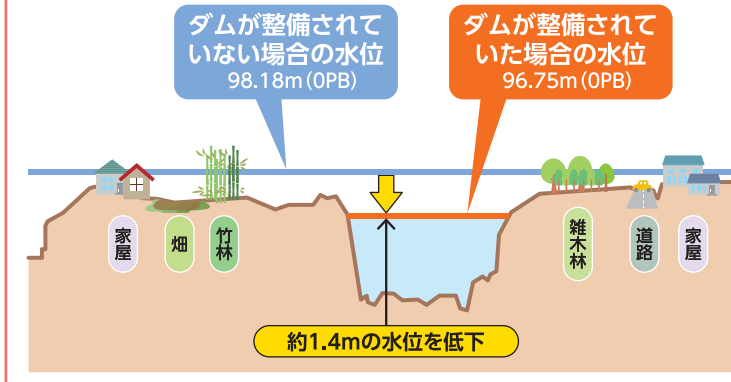
【平成25年台風18号における越水による浸水範囲(実績)】



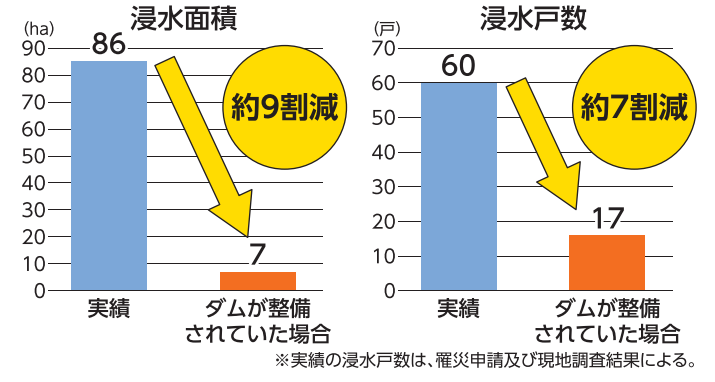
【大戸川ダムが整備された場合の浸水範囲の想定】



【大戸川ダムが整備された場合の水位低下効果】(堂村橋付近)



【大戸川ダムが整備された場合の越水による浸水面積・浸水戸数の想定】



## 55世帯の移転で成り立つ大戸川ダム建設事業

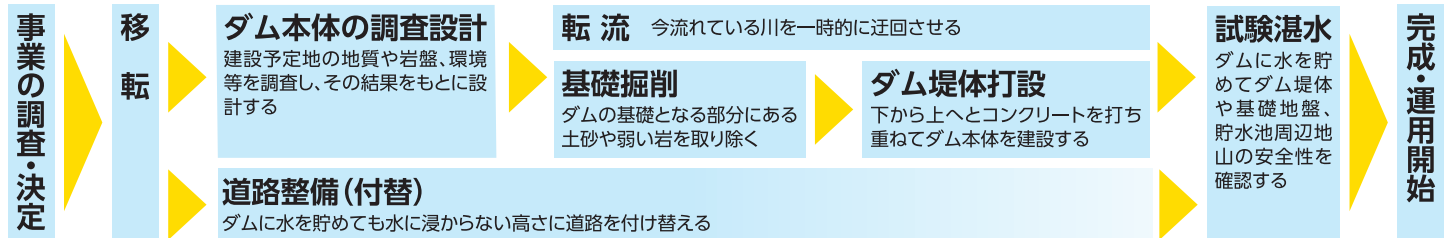
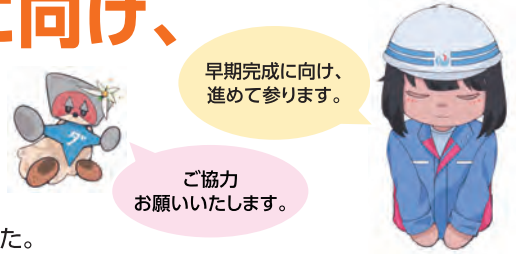
ダム建設に伴い、湛水地域となる大津市上上大鳥居町、上上桐生町、甲賀市信楽町黄瀬の55世帯210人の方々が先祖伝来の住み慣れた土地を後にされました。このうち、上上大鳥居町は集落全体での移転となり、平成9(1997)年、新たに開かれた「大津市大鳥居」への移転が完了しました。「ふるさと記念大鳥居収蔵庫」では、「消えゆくふるさとを残したい」と地元の女性が解体前の全53戸を一軒ずつ描いた水墨画など、ありし日の大鳥居の歴史を垣間見ることができます。



# 早期の完成・治水効果の発現に向け、事業を進めています。

## 大戸川ダム建設事業の進め方

大戸川ダムでは湛水地域の方々の移転は終了し、付替道路(大津信楽線)は開通しました。



## 大戸川ダム周辺地域の豊かな自然・文化・歴史

豊かな自然に囲まれた大戸川流域には、独自の文化・歴史が息づいています。大戸川ダムでは、これらの地域資源も活かしながらダム周辺地域の活性化に取り組んでいく予定です。

**中流域**  
交通の要所として栄え、約1300年前に聖武天皇の勅願で平城京の東北鬼門を守る祈願寺として建立された金勝寺があり、南からの表参道が大鳥居地区と伝わっています。また、この周辺は湖南アルプスなどハイキングコースで賑わっています。  
金勝山金勝寺の仁王門

**上流域**  
日本六古窯のひとつである信楽。かつて紫香楽宮という都があり、大戸川の上流黄瀬・牧地域には役所や寺院、住居ゾーンがあったことが発掘調査で判明しています。大戸川沿いには1km以上におよぶ桜堤が広がり水のせせらぎと共に桜を楽しむことができます。  
大戸川の桜堤

**下流域**  
大戸川の清流によって育まれる「田上米」は、古来より美味とされ、江戸時代編纂された近江輿地志略や明治27年の近江地誌にも良米とされ、現在でも米穀業界で高い評価を得ている。湖南アルプス、瀬田丘陵に囲まれた田上地域は、独特の歴史、文化が形成され、「田上手めぐい」や「三幅前垂れ」等の衣生活資料は国の有形民俗文化財に登録されている。  
田上山一帯(湖南アルプス)  
田上米  
田上手めぐいの女性達(昭和40年頃)

淀川水系	大戸川流域の直轄管理区間		延長	保全区域
大戸川	上流端/甲賀市信楽町黄瀬字角子2612番地の1地先の取水堰堤(左岸) [1]	下流端/大津市上田上牧町字六箇山国有林五十五林班は小班地先の砂防堰堤(左岸) [2]	※1 7.00km	河川区域から兩岸20m
田代川	上流端/大津市上田上大鳥居町字野々尾465番地先の林道橋下流端(左岸) [3]	下流端/大戸川への合流点	※2 3.24km	河川区域から兩岸5m
水越川	上流端/大津市上田上大鳥居町字九口歩725番地先の堰堤(左岸) [4]	下流端/大戸川への合流点	※2 1.38km	-

※1 昭和三3年4月5日 建設省告示第798号、自治体名等は現在 ※2 平成5年4月16日 建設省告示第1213号

国土交通省 近畿地方整備局 大戸川ダム工事事務所  
〒520-2144 滋賀県大津市大萱1-19-32 TEL.077-545-5675 FAX.077-543-5340

事務所webサイト  
<https://www.kkr.mlit.go.jp/daido/>

大戸川ダム 検索

X(旧Twitter) @daidogawadam



Webサイト



X(旧Twitter)



このパンフレットは、当事務所での職場体験やインターンに参加いただいた皆さまのご意見を参考に作成しています。  
\*田上中学校職場体験: 北村 怜さん、木村 晟乃亮さん、福岡 梨斗さん \*インターンシップ(就業体験実習): 古辻 俊樹さん、小西 優輝さん